

メルヴィルの“コケッコー!” 試論

小 堀 三 郎

はじめに

Herman Melville の“Cock-A-Doodle-Do!”はその奇抜な表題、単純なプロット、さらにまたそのユニークなモチーフからも「もっとも風変りな作品の一つに数えられ」¹⁾ている。しかし少しも奇を衒ったものでないことはその内容において明らかである。それどころかその作風はMelvilleの作品の中でも「もっとも喜劇的であると同時にもっとも真摯な作品である」²⁾(傍点筆者)。彼の他の作品に洩れずこの作品も、その根底において生の確証に肉迫を試みる作者終生の真摯なテーマに貫かれている。真摯さとは自己の内的必然性に根差しているという意味で宿命的な生き様に他なるまい。名声を求めながらもやがて自己の内的必然性へと回帰していく“*The Fiddler*”や“*The Happy Failure*”の主人公たちへの共感も「人生を愛する」³⁾作者の心性を表わしている。まさしく実生活においても初期の*Typee*, *Omoo* などによって博した冒険作家としての名声から次第に内的世界に沈湎し、無名のままに没している⁴⁾。

「闇」に立ちつくし、そこから存在の方位を求める精神にとって真摯さ以外に一体どのような生き方が残されていようか。彼にとって「書く」ことが存在証明のための精神的営為である限り、そこから葛藤の陰影を拭い去ることはで

きまい。たとえ，“Cock-A-Doodle-Do!”を書いた1853年が*Moby Dick* (1850), *Pierre* (1851)の長篇に精力を傾注した後の「力の衰えていた」⁵⁾時期であったとしても、そしてまた喜劇的装いを纏っていようとも、そこに作者の飽くなき希求の精神が貫かれていることは確かである。

I

「天上の神に栄光あれ!」この「澄み渡った」「音楽的な」響きに満ちた鶏鳴が散策中の語り手である「私」の耳を穿つ。「私」の内部で何かが共振し、意気高らかな精神が目覚める。この語り手は「彼岸」に「妖精の国」を見て、その衝動で「禁」を犯し一人で山中に踏み入った“Piazza”の「私」と、そしてまた「遙遠なものを渴望し」て海に魅せられたMelvilleの半身像でもあるIshmaelと異種の人物ではない。

物語りは「意気軒昂な精神」を打ちのめす時代の全般的風潮に苛立ち、またそれに伴う個人的諸問題を抱えて塞ぎ込んでいる一人称の語り手の登場に始まる。「私」は眠れず、山腹の牧場へ散策に向かう。冷たい霧の朝、この地域一帯、塞いだ気分の「私」には「生焼けの肉」のように見える。川は瘴気を帯びた霧が垂れ込めている。「時代の進歩」に呪いをぶつけ、祈禱の最中にも鼻先に証文を突きつけてくる借金取りに憤激を覚える。「ひどい世の中だ」、そんな気分の「私」の耳を高らかな美しい鶏鳴が突然穿つ。活力が生じ、鬱陶しい気分は霧消していく。食欲は俄然旺盛となり、*Tristram Shandy*を笑い、傍若無人の借金取りを追い返す。「私」は遮二無二その雄鶏を、たとえ不動産を抵当に

1) James E. Miller: *A Reader's Guide to H. M.*, Thames and Hudson, London, 1962, p. 165.

2) William B. Dillingham: *Melville's Short Fiction*, The University of Georgia Press, Athens, 1977, p. 73.

3) “‘Cock-A-Doodle-Do!’ and Some Legends in Melville Scholarship” by Sidney P. Moss in *American Literature*, XL (May, 1968)

4) Lewis Mumford: *Herman Melville*. Secker and Warburg, London, 1956, p. 162.

5) *Ibid.*, p. 158.

入れても自分の所有にしたい欲求に駆られ、鳴き声の方角だけを頼りに何日にもわたって飼い主を探し歩く。その声は語り手以外の誰の耳にも響かず、その願いの力にならない。ある朝、たまたま「私」のもとで賃仕事をしていた男に金を支払うためその住居を訪ねて、その家族が「トランペット」と称しているその雄鶏に出会う。赤貧洗うが如き状態の中で死に頻している家族を抱え、自らも病いに病む彼は語り手の如何なる申し出をも一笑に付してしまう。「トランペット」をめぐって営まれる一家の病める生活はその鶏鳴によって「幸福」感に浸っている。語り手はその響きに喜びを感じつつ、つぎつぎ死んでいく家族を見取る。続いて彼らの最後を見届けるかのように「トランペット」も霊的な一声を放って息絶える。この事実の感銘に「トランペット」の擬態を演じ、朝夕、長々と「コケッココー、オー、オー！」と「鶏鳴」を発する「私」になっている。

☆

憂鬱に病みそして遙かな鶏鳴に気持の蘇える語り手は作者 Melville の心性を多分に負っている。「物語りは初めから世の中を見る眼に平衡心が欠けている」⁶⁾と指摘されるのもそこに作者の目がすでにあるからであろう。作者にとって不条理な現実が語り手にとっては何とも「みじめな世界」に映る。

世界中いたる所、暴政から立ち上った意気軒昂な反徒が多数頭を叩きのめされる昨今であり、機関車や蒸気船による災難も同様に健気な旅行者たちの頭を痛撃している⁷⁾。

「私」は時代の潮流に逆らう独立不羈の精神に共感を示し、非情な蹂躪への苛立ちと憤激を宿している。しかしこの風潮を不可避のものとして見てか「私」の視界全体は憂色を帯びている。

6) Marvin Fisher: *Going Under*, Louisiana State University Press, 1977, p. 165.

7) Herman Melville: "Cock-A-Doodle-Do!" in *The Apple-Tree Table*, Greenwood Press, New York, p. 211.

散策の途中、山腹で朽ちかけた丸太に腰をかけた顔を向ければ、「延々たる外輪山の麓に沿って熱病の悪感に病む川が蛇行して」⁸⁾おり、「ここかしこに懶げにきれぎれの霞が空中を漂い、さしずめ民棲まぬ国土か舵輪なき船舶の如くに見える」⁹⁾。さらに「遙か盆地の村落一帯を棺衣にも似た霞の天蓋が広範囲に覆っている。村人の濃密な呼気でまさに煙突の濃煙であり、村落を囲む山並みに拡散を妨げられている。余りに重く生気に欠け自らは立ち上ることができず、村落と天空の狭間に不機嫌な顔を数多く、そしてむずがる子供を抱えた多数の人々を隠していたのだ」¹⁰⁾。地域全体を覆う自然の鬱陶しくも重々しい雰囲気を見ている「私」は自ら「暴政」に反抗し「頭を痛打」される「意気軒昂な反徒」の類いではない。むしろ内的現実性を予感しつつも「反徒」への共感に留まっている。だから「私」が「瘦身を折って山腹の急勾配を登る」¹¹⁾とき「頭が地表近くにくっつきこの世界にごつつんこせんばかり」¹²⁾の姿勢でありながらも、所詮は「せんばかり」であって、ただ「質素なダブルコートのボタンをかけてじめつく外気から身を守る」¹³⁾ことしかできない。この事実気付いてただ無力の反証として「恐ろしい薄笑いを浮かべるだけ」¹⁴⁾なのだ。周辺に「新旧の勁草が競い合って」¹⁵⁾「二分された王国」¹⁶⁾を形づくっている様は語り手＝メルヴィルの現実的生活を取り巻く「近代」の大きな流れと、それから自らを守ろうとする内なる精神との宿命的な遭遇を斜視的に見た風景であり、「恐ろしい薄笑い」は内なる葛藤の反証でもあろう。これが仮定法を藉りて反転した心情を表わすとき強烈な言葉となる。

もし暫時たりとも私を北米の独裁者に仕立

8) *Ibid.*, p. 212.

9) *Ibid.*, pp. 212-3.

10) *Ibid.*, p. 213.

11) *Ibid.*, p. 211.

12) *Ibid.*, pp. 211-2.

13) *Ibid.*, p. 211.

14) *Ibid.*, p. 212.

15) *Ibid.*

16) *Ibid.*

ててくれたら、連中（鉄道や蒸気船の経営権をもつ幾多の悪漢共や馬鹿者共）を縛りあげ、縛り首にし、腸を引きずり出し、手足をもぎ取り、七面鳥のようにフライに揚げて焼いて茹であげ、シチューにし、天火で焙って胡椒でまぶしてやりたい¹⁷⁾。

この凄まじさは現実が個人を超えた大きな流れであるという事実と、それに対抗できない無力感に半ば由来するものであろう。身を避ける安全な場所がなければ願望が仮定法の装いの下に表われてくるのは極く自然のことである。あるいは、現実とは様々な営みであり、そこに安堵の場がなければ、現実は地獄に他なるまい。天上的世界への逆説的可能性が残されているのはそのような地獄体験の中であらう。W. B. Dillinghamは語り手にとって現存の世界こそ「地獄」¹⁸⁾と見る。さらに氏は「この世界の擬人化が借金取りである」¹⁹⁾と言う。「こいつときたらどんな機関車よりも恐ろしくて寿命の縮む思いだ」²⁰⁾。「日曜日だろうとわざわざ教会までついてきて一緒に同席し、しかつめらしく祈禱の個所をきちんと開いて手渡し、祈りの最中に鼻先にいやな請求書を突きつけて私と救済との間に出しゃばってくるのだ」²¹⁾。金の論理が横行する巷には小銭の頓服薬を必要とする幼な児が熱病に苦しんでいる。こんな現実を斜めに見て「私」の右肩がリューマチで痛む。たとえば満員の船中で自分の寝台を病身の婦人に譲って朝まで雲雨に打たれて甲板にいればその善意に対する返礼はリューマチの疼きだ。この世の様々な不条理が消化できない。「私は消化不良に苦しんでいるのだ」²²⁾。「消化不良」は虚飾と無縁な点において誠実な自己反応と言えるものであろう。「消化不良」が克服され、自己の方位が開示される時点とはこんな時かも知れない。

II

「澄み渡り、響き鋭く、気概に溢れ、喜び一杯の、歓喜に満ちた」²³⁾ 鶏鳴が「私」の根幹部を揺がす。「天上の神に栄光あれ！」「死を言うな！」はっきりと「私」にそう告げている。この鶏鳴の方向に耳を傾けているのは長い冬を冷たい食物で過ごし、たったいま家畜小屋から出て来たばかりの「肘のよにとがった骨が突き出した」²⁴⁾「みじめな姿」の二歳牛であり、「私」は耐えた者同士が寄せ合う親近感を感じる。まだ見ぬこの雄鶏の響きはこれまで耳にした如何なる鶏鳴とも異なり、高貴な血筋のシャンハイ種と想像する。その響きですでに「私」自身の内部にこれまでにない変化が生じているのに気付く。「私は少し元気が出始め」²⁵⁾「体が燃えてきた」²⁶⁾ばかりでなく、「霧も薄れ」²⁷⁾そして「向うには太陽が顔を覗かせ始め」²⁸⁾ている。幾度か聞くうちに「消化不良」はものかは、「今朝の朝食への食慾は一週間も食べてなかったようだ」²⁹⁾し、しかも「黒ビールとビフテキ」を欲しいと思う。これまで沈んだ眼に映った「公認殺人機械」の列車も、村落を覆う「棺衣」の霞も一転して語り手の心の明るさに照らし返される。

あっ、下り列車がやってくる。白い車輛だ。一筋の銀線のように木々の合い間を突き抜けていく。蒸気パイプがシュツ、シュツと何と楽しげなことか！ 乗客たちも楽しげだ。ハンカチを振っている。街に行き牡蠣を食べ、友人たちに合い、サーカスに立ち寄るのだ。向うの霞を見よ。山のまわりを何と静かに渦巻き、うねっていることか。太陽が光りをその合い間に織り込んでいる。村の青い煙を見よ、花嫁のベッドにかけられた空色の天蓋の

17) *Ibid.*, p. 214.

18) W. B. Dillingham, *op. cit.*, p. 68.

19) *Ibid.*, p. 67.

20) H. M. *op. cit.*, p. 215.

21) *Ibid.*, pp. 215-6.

22) *Ibid.*, p. 217.

23) *Ibid.*, p. 218.

24) *Ibid.*, p. 217.

25) *Ibid.*

26) *Ibid.*

27) *Ibid.*

28) *Ibid.*, p. 218.

29) *Ibid.*, p. 220.

ようだ。河が牧場に溢れていたあの地域の何と明るいことか³⁰⁾。

“Piazza”の中で遠方の輝きはその語り手の眼を射たのと同じように「シャンハイ」の鳴き声が「私」の耳を穿ち新しい人間へと変貌させている。だがあの語り手は「輝き」を放つ悲惨な実体を直視するまでには草生い茂る山道を「この先行くな (go-no-further)」の果実を嚙りつつ、アリエスに導かれながら踏み入ったことを思えば、まだ雄鶏は「私」を励ましてはいるもののその姿を現わしてはおらず、その意味ではまだ暗示を受けるにとどまっている。

しかし「シャンハイ」の高らかな鳴き声で内部で何かが始動していることには気付いている。活力に溢れ、「借金取り」に立ち向かう気力を持ち「今日、私をせつてきたら叩きのめしてやろう」³¹⁾と思う。これに応じて「シャンハイ」は「奴を打ちのめせ」と高らかに告げる。半ば独裁者の気分からか「シャンハイ」の命令に従い、催促にきた彼に乱暴に振舞う。「私は無礼な借金取りのコートをはひっ掴み」³²⁾「水夫結びで縛りあげ、請求書を口に突っ込み、我が家の回りの広々とした場所に連れ出した」³³⁾。鶏鳴によって願望を行動化している。エイハブの「狂気」の血筋をやはり「私」も引いているのであろう。その血筋の前には現実は無構築であり、その仮面を剥ぎ取らずにはいられない。

「借金取りという奴がこの世の中に生まれてきたのはただ蹴飛ばされ、絞首にされ、痛めつけられ、叩きのめされ、息を止められ、がつんと張られ、ハンマーで打ちのめされ、溺死させられ、棍棒で殴られるためにすぎないのだ」³⁴⁾と言う。ここには「壁を打ち抜かねば外に出られぬ」³⁵⁾「囚人」に自分を譬え、「その一念は鉄

の軌道にはめられている」³⁶⁾小エイハブの意志がある。それはまた「この世と闘ってこれを打ち負かし、天地がひっくり返ろうとも鳴くことを決意した」³⁷⁾雄鶏の意志と重なるものである。信念が運命であり、運命が同時に信念でもある完結的世界とも言える。その響きが「私」にとって「他の如何なる事柄とも全く関わりを持っていないかに思え」³⁸⁾るのもこの故であり、それはまた孤独を通してしか達成できないだけに「狂人」にしか、あるいはその内的衝動の理解者にしか聞き取ることでできない固有の声でもある。もしこれに共感してその声を実行し、自らが「雄鶏」になることが現実の呪縛を解き放つことであれば、その本姿を確かめて自己のものとしてせざるにはいられぬ筈である。「私」が雄鶏「シャンハイ」を自分の足で探し求めていくのもその「狂気」的生の検証的試みに他ならない。

III

この試みは現実の不条理を心に病む「私」にとって論理ではなく寧ろ衝動である点において不可避のものである。このすぐれて個人的な試みにもかかわらず、当初、「私」は「貧しい人には誰であれ、このような東洋のトロフィー、雄鶏の咽喉下に揺れる聖ポール大寺院の大鐘を所有することなどできない」³⁹⁾と決めてかかり「私の土地をもう一度抵当にぶち込」⁴⁰⁾んでも「買う」積りでいる。しかし金銭の迷妄による「買う」感覚は雄鶏との出会いを裏切っていく。たまたま出合った農夫に「きわ立った鶏鳴」について問えば、「きわ立つ」は別として雄鶏なら「未亡人のクロウフットさんところにも、地主のスクエアトウズさんところにも、また自分のところにもおり、どれもよく鳴く」⁴¹⁾と言う。また最近立派な鶏舎つきの豪邸を建てたという、そしてこれこそ持ち主に違いないと思われる大金持の紳士に出会う。彼は「シャンハイを10羽

30) *Ibid.*

31) *Ibid.*, p. 221.

32) *Ibid.*, p. 223.

33) *Ibid.*

34) *Ibid.*

35) H. M. : *Moby Dick*, Modern Library College Editions, p. 162.

36) *Ibid.*, p. 165.

37) H. M. *op. cit.*, p. 225.

38) *Ibid.*, p. 226.

39) *Ibid.*, pp. 228-9.

40) *Ibid.*, p. 227.

41) *Ibid.*, p. 229.

も所有して」おり「どれも一樣によく鳴き」「きわ立った鶏鳴は自分にも区別できぬ」⁴²⁾と言う。自分以外の他者の耳はその「きわ立った鶏鳴」に対して塞がれており、このため毎日それを聞くにしてもあるいは幻聴ではないかと怪しむほどになる。内なる出来事か外の事実かその区別を「怪し」んでいるとも見て取れる。「鶏鳴」が内なる世界の声であれば当然他者には無縁の筈である。そして「私」の探索は内面の模索を意味することになる。

「私」のもとで薪作りをしていた男がその手間賃を受け取りに訪れたものの、たまたま小銭が無いので、「私」は後日散歩がてら山道を辿り彼の住居を訪ねることになる。およそ鶏鳴との関わりから言えば、「私」の視界には存在しない筈の極貧に身を置く男である。メリーマスクと言い「長身で痩せており、面長で物悲しげではあるがどこか人知れぬ楽しげな目をしている」⁴³⁾。素直に自らを生き、人目を気にする様子は見られない。灰色のコートは長目でよれよれで、くたびれた帽子をかぶっている。「人に話しかけられなければ、決して自分からは話しをしない」⁴⁴⁾男である。たまたま「私」の目にとまったときの彼の食事は驚く程に質素であり、「私」の示す好意に対しては自尊心に溢れた、穏かで気持ちよい態度で謝意を示す。彼への関心と同時に敬意は高まり、「合衆国大統領に立候補させるのもまんざらではない考えだと思」⁴⁵⁾うほどだ。鶏鳴が誰の耳にも響かなかつと同様にこのメリーマスクなる人物も「私」のもとで薪作りの請負い作業をしながらこれまで全く誰からも人目を引く男ではなかった。鶏鳴の響きに衝撃的活力を与えられた「私」はいままた「ソロモンと同じ心を持った」⁴⁶⁾この真面目な気質の人柄に魅了されてしまう。Melvilleによればそれはこの世の最深部を見た「悲哀の人」であり、同時にそのメリーマスクに水夫経験を書

き加えていることを思えば多分に作者自身の片鱗を感じさせ、その精神的境位を窺わせるものがある。

彼のあばらやは「線路傍の淋しい不毛の開墾地」にあり、そこに至る道は誰にも知られていない様子であった。「救いようのない病人」の妻と「悪性の関炎にかかっ」たり、「くる病に苦しむ」子供達を抱えて赤貧の極にある。子供らのために乳牛を買い入れたもののこれに死なれ新たに買う余裕もない。メリーマスクの賃仕事でようやく糊口をしのいでいる状態にある。人里離れて暮らすあばらやへの道は樹木の生い茂った山肌と、鉄道がその真中を突っ切っている藪生い繁る沼沢の合い間にあり、そして鉄道は日に何度も「これぞ人生と呼ぶもの」を見せつける。「美しいものを、地位を、流行を、健康を、旅行を、鞆を、金銀を、織物を、食料雑貨を、花嫁花婿を、幸福な夫婦を、ことごとく」⁴⁷⁾見せつける。自然と文明の狭間に隠者の孤高をもって生きるこのメリーマスクは地上性を這い回った末、世俗の全てを代償にして固有の内面性を生きる精神のあり方を示している。それは“The Fiddler”の Hautaboy と同種の間人であり、成功を名声を夢見つつ結局は失敗を静かに受容する“The Happy Failure”の Uncle が到達した境地であろう。

「私」には、求める雄鶏の所在が近隣の「紳士」と頭の中でいぜん結びついて離れない。そんな「私」にメリーマスクは「きわ立った鳴き声の雄鶏を飼っている」「紳士など一人も知らぬ」⁴⁸⁾と言う。だが突然「私」の目の前に高らかな鳴き声を響かせて一羽の雄鶏が姿を現わす。「雄鶏というよりは寧ろ金鷲であり、雄鶏というよりは元帥のようであり、雄鶏というよりは絢爛たる武具を纏ってヴァンガード号の上甲板に立って戦闘に臨むネルソン提督のようであり、雄鶏というよりも王衣を纏ってエール・シャペルに立つシャルルマーニュ皇帝のように見え

42) *Ibid.*

43) *Ibid.*, p. 238.

44) *Ibid.*

45) *Ibid.*, p. 240.

46) *Ibid.*

47) *Ibid.*, p. 242.

48) *Ibid.*, p. 241.

49) *Ibid.*, pp. 243-4.

る」⁴⁹⁾。「金鷲」「元帥」「ネルソン」「シャルルマーニュ」など最高の形容を伴ない、大富豪こそその所有者に相応しい雄鶏が死に頻した極貧生活者、しかも、「私」のもとで賃仕事をしていた、いわば身近な人物のものであることを知る。金銭によってその雄鶏を入手したいと申し出る。いまだ「私」にはその二者の結びつきが不可分の事実なのだという認識には至っていない。王者の風格を具えた雄鶏は当初の予想と異なり、その場で孵化し、彼によって育てられたものだという。これに500ドルの値をつけても彼はそれを笑殺し、手離す積りは全くないという。「私はしばしば立ちつくし、この雄鶏を讚え、この男に感じ入っていた。やがて私はこの前者への讚美の念が倍加し、後者への畏敬の念は倍々加して行く気持であった」⁵⁰⁾。「私」はこのとき二者が不可分に結ばれており、その中に立入ることができないのだ、と感じる。その場で彼の鳴き声を聞くとき、「私」はメリーマスクの家族と雄鶏に対し崇高の念を抱きつつ、その悲惨な現実を耐える生の明るさに圧倒され、知らずして「見る」立場に立たされてしまっている。「無学な男」を前にして「見る」「私」の入り込めぬ一線がそこにはある。雄鶏は「私」にとってよりメリーマスクにとって生の支えとなっている「狂気」の部分かも知れない。狂気とはすぐれて知の営みとの決別を意味するからである。Miller氏が「雄鶏は現存世界に対抗してもいなければ、また虚飾なき精神世界をも提示していない。その空威張りは自身の鮮やかな羽毛のように真なるものでない」⁵¹⁾ という指摘は彼がメリーマスクの精神との関連においてのみ存在意味があるものを、これを切り離し、独自のものとして把握しようとしているのではあるまいか。あるいはまた、Dillingham氏によれば、“cock”がpennisを象徴するところから“cock”なる語は雄鶏以上のものを表わすために使われている⁵²⁾ るといい、雄鶏の発見をメリーマスクと

の関連よりも寧ろ「語り手の去勢化についての不安と克服を象徴的かつ喜劇的に説明したもの」⁵³⁾ と見ており、この作品の主要テーマを「独立性の探追」にあるという興味のある見方を示している。いずれにしてもメリーマスクと「私」の中間に立って二者を結ぶ象徴であることは確かであろう。

IV

招きに応じてメリーマスクのあばらやに入るや、その「内側」が「私」の眼に鮮やかに映し出される。天井は無く、たる木がむき出しのままであり、山腹で鶏鳴の響きに食欲旺盛となり活力に満ち満ちた「私」が目前にしたものはたる木から垂れ下った「干し肉の塊であり、土間の片隅にある一山のじゃがいもであり、一袋の唐もろこしであ」⁵⁴⁾る。毛布を縫い合わせた仕切りの片隅からは病身の女性の声と病める子供たちの声が聞こえてくる。雄鶏は堂々と部屋の中央に立っており、その奇妙な雰囲気は「奇妙な超自然的様相を呈している」⁵⁵⁾る。一家が「トランペット」と称している雄鶏は（「私」の鑑賞眼からはオペラ歌手の名に因んで「ベネベントーノ」こそこの姿に相応しいと思われる）「あばらやに光彩を放ち」その「貧しさに光輝を添え」そして仕切りの奥からはその響きへの讚美の音が聞こえてくる。メリーマスクの指示で「トランペット」は高らかに鳴き声を響かせる。「私」はその響きが彼らの回復に障るのではないかと案じてしまう。逆に「これは気持を鼓舞してくれませんか？勇気を与えてくれませんか？絶望に立ち向かうものを与えてくれるじゃありませんか？」⁵⁶⁾と言う彼の言葉は両者の世界の異質性を鮮明に浮かび立たせる。日常的世界を一步踏み越えたものとその内側に留まるもの、あるいは自己の信じる内的世界を歓喜のうちに生きるものと、共感によって半歩近づいているとはいえ外側の世界に対して盲目になり切

50) *Ibid.*, p. 247.51) James E. Miller, *op. cit.*, p. 167.52) W. B. Dillingham, *op. cit.*, p. 59.53) *Ibid.*, p. 61.54) *Ibid.*, *op. cit.*, pp. 247-8.55) *Ibid.*, p. 248.56) *Ibid.*, p. 252.

れぬもの、この微かな差が「私」とメリーマスクとの距離を大きく距てている。これは *Moby Dick* 中のエイハブとイシュメルであり、*Bartleby* 中のバートルビーとその語り手の関係に他ならない。それぞれ二者の間には理性では超えることのできない、そして目には見えない決定的境界線があり、これは Melville が「向う側には何もないかも知れぬ」が「囚人が逃れ出るためには打ち破らねばならない」「壁」とも言えるものであろう。「壁」を超えているメリーマスクの意のままに鳴く「トランペット」に「私」が恐れをなすのも「囚人」から解放され切っていないからである。「壁」の向こう側の実体を確かめる積りでか家族の者に会わせて欲しいと申し出る。弱々しい歓迎の声に仕切りの奥で見たものは疲弊し切ってはいるものの奇妙に明るい表情をした病妻の顔であり、さらに肩を並べて横たわっている三人の青ざめた子供たちであった。彼らの目は「精神的な喜びに満ち」⁵⁷⁾ であり、「雄鶏の輝やく羽毛の光りを浴びているように見え」⁵⁸⁾ る。「私」の眼に映ったその実体は貧困と喜びの不可解な融和である。彼らにはその雄鶏は「薬剤師より優れた」⁵⁹⁾ ものであり、「コック博士そのものである」⁶⁰⁾。これはメリーマスクが精神生活のみを志向していることを意味している。病人たちの回復の可能性について問えば、明るい表情で “not the least, very little” と答える。その何気なさがどこか「私」を寄せつけない。目の前で言葉を交わしながらも埋めつくせぬ乖離を彼との間に感じてしまう。「悲しい生活」と同情を示せば、彼はきっぱりとその言葉を拒絶する。「私にはトランペットがおりますよ」⁶¹⁾。さらに「高価なシャンハイを所有している人はお大尽かと思っていましたよ。あなたのような貧しい人がこんな元気潑刺たる雄鶏をもっているなんて考えられませんでした

よ」⁶²⁾ と言えば、「私のような貧しい人ですって？ どうして私を貧しいとおっしゃるんです？ 私の雄鶏はあなたを励しませんでしたか？……私は大いなる博愛主義者ですよ。豊かな人間です。大いに豊かでとても幸せです」⁶³⁾。赤貧状態にありながらこの豊かさに満ちた言葉は「私」を「彼への賞讃の気持で一杯」⁶⁴⁾ にするものではあるが「私」を突き放し、重い気分にしてしまう。山腹を登るときの「恐ろしい薄笑い」は消え失せ、メリーマスクと、脱け出ようとしている苛立ちの世間との間にあって「落着かな」い気分に戻ってしまう。

ふたたび「私」がメリーマスクのあばらやを訪ねると、鶏鳴の響きとは対照的に家の中はひっそりと静まりかえっている。「トランペット、鳴け」。横たわっているメリーマスクの弱々しい肉体に潜む強靱な心が「私」をぞっとさせる。病いに対する勝利の恍惚感に浸りながら「みんな元気だ」と言って、彼は息絶えてしまう。「恐ろしい恐怖が私を捉え」⁶⁵⁾ そして「トランペット」は響く。続いて妻もそして子供たちも死に、ふたたび「トランペット」は響く。死者の枕下で響く「トランペット」は「慈愛に満ちた喜びに浸っているかに見える」⁶⁶⁾。死の陰惨さは無い。

死と「トランペット」の高らかな響き、それは再生の象徴に見える。「救済を求める心が私の目の前で彼らを精霊に変えたのだ。私は彼らのいる場所に天使を見た」⁶⁷⁾ と言う。貧困と精神の豊かさ、「私」にとってのこの不条理をメリーマスクたちは難なく超越してしまっている。もし「トランペット」が彼にとっての存在証明であるとすれば、その響きに耳を穿たれ、精神を鼓舞されたことはメリーマスクの境位に達してないにしろ、自身の存在証明の欠落に目覚めた意味はもっている筈である。一家の死を見届けるかのように「トランペット」は「この世の

57) *Ibid.*, p. 250.

58) *Ibid.*

59) *Ibid.*

60) *Ibid.*

61) *Ibid.*, p. 251.

62) *Ibid.*

63) *Ibid.*, p. 252.

64) *Ibid.*

65) *Ibid.*, p. 254.

66) *Ibid.*

67) *Ibid.*, p. 255.

68) *Ibid.*, p. 256.

ものとも思われぬ一声を響かせ⁶⁹⁾「私」の足許で死んでいく。所詮「トランペット」は「無学な」メリーマスクのものでありそれを所有できない以上、そしてまたその事実気付いた以上、メリーマスクに見る存在証明の問題は自己自身の課題とならざるを得ない。自ら羽ばたき朝夕長々と「コケッコー、オーオーオー！」と鳴くのも「トランペット」を持たぬ故である。その姿は滑けいではあるが、知性とは無縁に生きた「無学な」メリーマスクが「私」に向かって言う「いい人」に対して開かれた再生への可能性を生きようとする真摯な姿に見える。Dillingham の指摘の通り、「彼（語り手）はなお、イシュメルに似た笑う憂鬱者である⁶⁹⁾」り、その視線は「無学な」メリーマスク＝狂気のエイハブに讃美のうちに向けられている。「私」が彼らのために建立した墓石の碑文「おお、死よ、汝の痛みは何処にや、おお、墓よ、汝の勝利は何処にや⁷⁰⁾」は Dillingham の言う「メリーマスクの勝利」というよりは「私」自ら「大地は人に印を刻む」が「結局人間がこの大地に印すものの何と些細なことか⁷¹⁾」と独語するように人生の非情性と、自然の巨大な営為に対する人間の無力さを語るものではあるまいか。それは

Moby Dick の巻末でエイハブ一行を呑みつくしたあと、何事もなかったかのような大洋の表情に酷似している。

む す び

鶏鳴は「私」に衝撃を与えた。しかしそれは飽くまでも他の誰の耳にも塞がれた遙かな導きの声であり、「私」にのみそれが聞こえるのは「私」自身が作者の内的投影であるからであり、いわば天才の刺ともいうべきものであろう。メリーマスクのあばらやが語る実体、見るものをして慄然とさせそして誰の眼にも隠された実体は日常性をもっとも避けて通りたい、そして誰もが抱える生の暗部に他ならない。「トランペット」の高らかな響き、精神の歓喜が生暗部で分ち難いものとしてある以上、その真実を生きようとするならば「眼」を捨て、「耳」の世界に生きるか、あるいはその不条理を苦悶しつつ孤独を耐えていくかのいずれかであろう。それは *Benito Cereno* の主人公が悲劇的事件の後に語るわずかな言葉が物語っている⁷²⁾。時代を超えた「眼」と「耳」をもって生れたものの天命とも言うべきものであり、それが苦悩の姿としてここに描かれている。

69) W. B. Dillingham *op. cit.*, p. 73.

70) *Ibid.*, *op. cit.*, p. 256.

71) *Ibid.*, p. 213.

72) Herman Melville: *Benito Cereno*, Hokuseido, p. 47. 「過去は過去です。……あの明るい太陽はもうそれを忘れてしまっています。青い海、青い空、これらは新しい頁をめくっていますよ」このアメリカ人船長の言葉に対し、ベニト・セレノ船長は答える、「それらは記憶を持っていないから」であり、「人間ではないからです」。